



日本聖公会婦人会 2025年2月20日発行
ニュースレター No.79

〒297-0032 千葉県茂原市東茂原 10-192 永井眞由美方

電話/FAX 0475-24-6915

「目を覚ましていなさい。信仰に基づいてしっかり立ちなさい。雄々しく強く生きなさい。
何事も愛をもって行いなさい。」（コリントの信徒への手紙 I 16 章 13 節・14 節）

日本聖公会
九州教区主教 ルカ 武藤 謙一

日本聖公会婦人会の皆さま、神様の恵みのうちに新しい年を迎えられたことと思います。

1月の教区教役者逝去記念聖餐式の説教をするにあたり、九州教区第2代教区主教のアーサー・リー主教のことを改めて学びました。

アーサー・リー主教は1909年から1935年まで26年間、九州教区主教として働かれました。もう100年くらい前の教区主教ですが、その働きの中には今の時代でも大切なことがいくつもありました。リー主教は福岡神学校を設立して聖職養成に尽力したかたですが、*レイ・リーダーの養成にも尽力します。レイ・リーダーのなかには自分の教会だけでなく、教区内の教会を巡って働くことを認可された人もいました。「すべての信徒は神の働き人、すべての教会は伝道機関」はリー主教のモットーの一つでした。また赴任する教役者に宛てた手紙では、聖職としての心得が記されており、リー主教が何を大切にしていたかが分かります。日々の働きは祈りをもって始め、よく計画を立て、霊的準備をすること、小さなことにも力を尽くすこと、信徒訪問を計画的にすること、一人で働く時には誰も見ていない、どれだけ働くかは自分次第である。誘惑に負けないように。礼拝については聖堂内の整理整頓から始まって事細かに指示されていますが、今でも聖職として大切なことが多くあります。



わたしはこの3月で定年退職を迎えます。まだゆっくり振り返るゆとりはありませんが、リー主教が大切にされていたことに照らしてできていなかったと思わされるが多々あります。

冒頭の聖句は、リー主教がロンドンから最後の教区会に送った主教訓辞で示された聖句です。信徒の高齢化、信徒数の減少、教役者不足、財政逼迫は日本聖公会の各教区・教会だけでなく、婦人会にとっても共通の課題でしょう。そのような状況のなかだからこそ冒頭の聖句を心に留めながらこの一年を過ごしたいと考えています。

今年も日本聖公会婦人会の働きのうえに、またそこに連なるお一人おひとりの上に神様の祝福が豊かにありますようお祈りいたします。

*レイ・リーダー：信徒奉事者のように礼拝奉仕をする人。

または、病者訪問や洗礼、堅信準備なども含めて教会で奉仕する人。

日韓宣教 40 周年記念大会を終えて

テレジア 黒澤 圭子 日本聖公会日韓協働委員
東京聖テモテ教員



日本聖公会と大韓聖公会は、神さまのお招きにより 2024 年 10 月 21 日から 24 日まで韓国・済州イシドルリトリートセンターにて「日韓聖公会宣教協働 40 周年記念大会」を開催した。参加者は両聖公会の主教、司祭、信徒、海外聖公会からの特別ゲストを含めて 80 名、そしてお心を尽くして下さった済州友情教会、西帰浦（ソグィポ）教会のボランティアの皆さんと共に 4 日間を過ごすことができた。

今回の記念大会は「共に生きる世界～神・人間・自然との和解」をテーマに、「神と和解させていただきなさい」（コリント二 5：20c）を主題聖句に行われた。

1 日目は参加者の移動時間でもあったので夕方の開会礼拝から始まり、この 40 年間の映像による振り返りとミニ交流会を行った。1984 年に公式に始まった両聖公会の交わりは、この 40 年間に日韓

青年セミナー、社会宣教スタディーツアー、女性たちの交流、韓国からの宣教師派遣事業など、さまざまな形をとって取り組まれてきた。

2 日目にはまずソウル教区の朴泰植（パク・テシク）司祭の「私たちに与えられる和解」の聖書研究、そして「神との和解」「人間との和解」「自然との和解」というタイトルで両聖公会からお一人ずつ発題者となってお話しいただいた。大韓聖公会からは金長煥（キム・ジャンファン）主教、金均燮（キム・キョンセ）司祭、イ・ブンニ司祭が、日本聖公会からは武藤謙一主教、呉光現さん、長谷川清純主教、それぞれのお話を聞き、グループに分かれてお互いの思いを聞き合い、祈り合う機会を持たせたことにより、この混沌とした世界の中で私たちが生かされていることを見つめ合う時間となった。

3 日目には 4・3 平和公園を訪問し、4・3 事件の犠牲者を憶えて追悼礼拝を献げた。この事件は表から見れば 1948 年 4 月 3 日に起こった南北分断に反対する島民の蜂起に対する虐殺事件であり、韓国国内の事件と捉えられがちである。しかし、明治時代の日韓併合、第二次世界大戦末期の本土防衛のための済州島への基地建設、そして日本の敗戦による南と北の分断、と、私たちの歴史と深くつながっている。韓国の皆さんと献げた礼拝はそのことを受け止め直す大切な時間となった。



そして「日韓友情の家」の開所祝福式。今回の記念大会では、30 周年記念大会での共同声明「風の島を聖霊の島へ」という済州友情教会のビジョンの共有ということで会場に済州島が選ばれたが、この「友情の家」（リトリートハウス）は、この 40 年間に信仰の先輩たちが紡いでくださったものが形となって私たちに与えられたと強く感じるものであった。



4日目はこれまでの学びの振り返りを行い、特に青年たちからは、自分たちこそ宣教の主人公である、という声が聞かれたことの喜びを参加者と分かち合うことができた。

この4日間を神さまのお導きにより無事に終えられたことを感謝するとともに、50周年の時には私たちはどのような祈りを祈っているだろうかと思う。



2024年度被献日献金活用実施報告

<神学生枠>

ウイリアムス神学館 1年生
セシリア 浅海 由里恵 (大阪教区)

いつも、お支えとお祈りをありがとうございます。

今年度ウイリアムス神学館に入学を許された浅海由里恵と申します。皆さまからの貴重な献金をいただき、6冊の書籍を購入させていただきました。まず、1冊目は、『ヨハネ福音書入門—その象徴と孤高の思想—』という本です。神学館で新約学を教えていただいている前川教授が翻訳された本でもあり、集中講義でも参考図書として使用させていただきました。2冊目は『新約聖書外典』です。新約学の重要な文献として、参照させていただいています。3冊目は『A History of the Church in England』で、英国聖公会の歴史が学べる本です。英書講読の授業で使用しています。「もう金輪際英語はしたくないよう」と思っていた私ですが、聖公会の歴史を学ぶ上で日本語に翻訳されていない文献も多く、



(本著は邦訳がありますが) 英語にも取り組んでいます。4冊目は『アメリカ聖公会の歴史』という本で西原主教様中原司祭様によって翻訳された本です。私は日本聖公会の歴史に強い関心があり、ウイリアムス主教が日本に宣教された根っこの部分は何があったのだろうかと思い、少しずつ読み始めています。残りの2冊は神学館の授業のひとつ「霊性の形成と変容」のテキストです。『生きる力をはぐくむ愛着の子育て』には人間関係における愛着関係を学び、『共に生きる生活』はボンヘッファーという神学者の著作で“仕える者”とは何か、そして何が必要なのかということを読み進め、深めているところです。

さまざまな方と出会う日々の営みの中で、ひとりで「たつ」ことすら容易にできない自分自身に、他者によって生かされている自分に、気づかされ、砕かれ、私は何を削ぎ落とし、何を深める必要があるのかを学んでいます。

皆さまからのお支えに感謝しつつ、今後も歩みを進めていければと願っています。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

ウィリアムス神学館 3年生
ヴェロニカ 薦田 久美子 (大阪教区)

主の平和がありますように

いつも皆さまからお祈りとお支えをいただき、心から感謝申し上げます。

今回は4冊の本を購入していただきました。

内容は以下の通りです。

1. 聖書ヘブライ語日本語辞典…ヘブライ語をご教授くださった先生が薦めてくださいました。使う機会があるのか、また、私はヘブライ語がとても苦手なので(検索の仕方が独特です)使うことができるのかどうかも疑問だったのですが、使う機会が結構あり、検索もできていますし、購入していただいて良かったと思っています。

2. *The Wiley-Blackwell Companion to the Anglican Communion*…この本の一部を礼拝学の授業で学んだ時に、先生が一冊持っておくと良いと推薦してくださいました。アングリカンコミュニオン様々の状況を知ることができて興味深いです。

3. 断片の神学…説教論の授業で一部を学びました。私には理解が難しい箇所がありますが、おぼろげながら分かりつつあるところ。しっかりと理解できたと思えるまで繰り返し読もうと思っています。

4. *Women's Bible Commentary, Third edition*…2024年の4月から5月にかけてヴァージニア神学校の教授がウィリアムス神学館に滞在され、私たちと寝食を共にされました。

その中でいくつもの興味深い講義をしてくださり、学びに関するアドバイスもいただいた中で、この本はとても参考になる良い本だと推薦してくださいました。タイトルが示す通り、女性(の神学者)が書いた註解書です。日々の課題をこなすのに精いっぱい残念ながらまだパラパラとしか読めてはいませんが、他の註解書とは違う視点に触れることができると思いますので、きちんとページをめくる日が楽しみです。

さて、入学当初は分からないことだらけで一体どうなるのかと思った神学校生活ですが、残り少しになりました。卒業して教区へ戻る時には購入していただいた本を大切に持って帰り、長く活用させていただくつもりです。



聖公会神学院 2年生
聖職候補生 アンデレ 川島 創士 (中部教区)

+主のみ名を賛美いたします。

日本聖公会婦人会の日頃のお祈りとお支えに心から感謝申し上げます。昨年に続き、今年も貴重な被献日献金を用いて7冊の有益な文献を購入させていただきました。ここに感謝をもってご報告させていただきます。



①チャールズ・ガーキン著『牧会学入門』や②H. キュンク著『キリスト教-本質と歴史』は、「牧会学」と「総合ゼミ」で使用します。残りの、③M. Chapman, *Anglican Theology*. ④B. Gray, *Jesus in the Theology of Rowan Williams*. ⑤T. Gouldstone, *The Rise and Decline of Anglican Idealism in the Nineteenth Century*. ⑥R. Morgan, *The Religion of the Incarnation: Anglican Essays in Commemoration of Lux Mundi*. ⑦ M. Bryant, *Future of Anglican Theology*はいずれも「教理学」で使用します。とりわけ私の関心がアングリカニズム(英国宗教改革神学)にあることもあって、③～⑦の文献の射程は近現代のアングリカニズムに焦点を当てたものになります。難解なアングリ

カニズムですが、上記の文献はそれを読み解く際に多くの気づきを与えてくれる良書であります。

神学校に入学して2年が経過しようとしています。この間、勉学はもちろんのこと、日々の祈りや黙想を通して、自分自身と向き合う時間が与えられています。自らを問い直す姿勢は、おのずと世界や社会にも向けられ、これまで自明と思われてきたことを再考する作業につながります。それは孤独な作業ですが、あることに気がついた時、孤独な気持ちが少し和らぎます。それは日本聖公会婦人会のような存在のゆえです。日々のお祈りやこういうニュースレターなどが、会ったことの有無などの壁を取り除きます。そういう方々の祈りがあって、この本がある、あの本がある。そのことの当たり前を感謝のうちに実感します。自分自身の内面を見つめて見えてくる、外に開かれた視点のかけがえのなさを改めて実感します。

皆様のお支えに感謝しつつ、これらの書籍での学びを土台として、これからも学び続けてまいります。最後になりましたが、日本聖公会婦人会の皆様の上に神様の豊かな祝福がありますようにお祈りいたします。

<教区婦人会枠>

北関東教区婦人会

会長 秋葉 緑

2024年5月25日(土)、東京都三鷹市にあるナザレの家(旧ナザレ修女会)で、北関東教区婦人会の静想日がおこなわれました。北関東教区にはかつて聖ヨハネ修士会や神愛修女会があり、共に集まって祈ることを大切にしてきました。それがコロナ禍で集まるのが難しい時が続き、実に5年ぶりの静想日でした。

武蔵野の面影を残す緑豊かなナザレの家に16名の参加者が集まり、箱舟を思わせるような礼拝堂で沈黙して心を整えます。ご指導くださる高橋宏幸主教様の穏やかなお声で講話が始まりました。私たちの今を神さまの前にさしだして、委ねてみましょうという勧めとともに、「神さまをみる」「神さまをあじわう」というキーワードをいただき、黙想の時間に移ります。

黙想の時は、各自が会場の好きな場所に移動します。一人でいると

様々な雑念が浮かんできます。その雑念を横に置くように沈黙していると、だんだん心が整えられていきました。心が落ち着くと、周りの音や光、風、空気が全身に語りかけてくるように感じました。忙しく生活している自分が実に鈍感なことに気がつき、神さまに委ねると何が始まるのだろうと考えていました。昼食も沈黙の中でいただきます。

午後は「あなたはひとりぼっちではない」「いつもみまもってくださる神」がキーワードで、それぞれの場所で黙想の時を過ごしました。最後は聖餐式をして感謝を捧げ、黙想の余韻を感じながらそれぞれの帰路につきました。北関東教区婦人会総会で高橋主教様が「寝る前にその日の感謝を3つ思い出してみましょう」というお話をしてくださったことがあります。これもまた、一人で持つことの出来る黙想の時だと改めて思いました。



高橋主教様、大山チャプレン、ナザレの家ご担当者の皆さまに大変お世話になっての開催でした。この場をお借りして御礼申し上げます。被献日献金を活用し、豊かな静想日が持てましたこと、感謝とともにご報告いたします。

大阪教区婦人会

会長 辻 節子

大阪教区婦人会は、「秋の修養会」を10月18日（金）午後、高槻聖マリヤ教会で開催することができました。2023年に組織成立100周年を迎えた大阪教区ですが、この3年間、「教区にある施設の働きを知ろう」をテーマに、シリーズで学びを深めてきました。今回は、社会福祉法人聖ヨハネ学園に属する障がい者支援施設についてお話を伺うことになり、地域生活支援センター光・施設長の種本浩司氏を講師にお迎えしました。



地域支援センター光は、重度の身体障がいをもつ方を対象とした全室個室の入所施設で、定員36人の入居者一人ひとりが「ひかり、かがやく」ように、個々の特性やニーズに応じた支援を提供しておられます。現在、障がい者政策が「脱施設」の流れにある中、その先を行く形での地域密着型支援を展開し、家族を含め地域生活で培われた場所と人との関係を断ち切らないために、入居対象者は厳密に高槻市在住者に限定されています。このほか、短期入所、日中一時支援、放課後等デイサービスなどにも対応しておられ、地域の人々やボランティアを巻き込んだ、“地域の延長線上にある開かれた

施設」となっています。種本氏のお話は明快で分かりやすく、最先端にある現場の現状と福祉のあるべき姿について、多くを学ばせていただきました。参加者は信徒80人と教役者5人。信施金は全額を地域生活支援センター光にお献げしました。また前月に起こった能登半島洪水被害への緊急支援募金も行いました。

講演後は、いくつかの教会がバザーを出店、抹茶と和菓子の茶席が設けられるなど、楽しいひと時となりました。高槻聖マリヤ教会は大阪の中で一番北に位置する教会で、南の方からはなかなか出向くことができず、今回が初訪問という方もおられました。被献日献金からのご支援は、講師謝礼と会場費に使わせていただきました。講演会を開催し、会員交流の貴重な機会が与えられましたことを心から感謝申し上げます。



<有志グループ枠>

北海道教区

深川聖三一教会婦人会

代表 高木 和枝



約3年3ヶ月に亘ったコロナ禍は、人と触れ合うことへの制限を強いられ、会話も常にマスク越しと、それまで当たり前のように送っていた生活が当たり前でなくなった日々でした。感染拡大もようやく落ち着いて、久しぶりのブロック集会を当教会婦人会が担当することになりました。この度は、「共に楽しく歌おう」をテーマに婦人会以外の方にも呼びかけ近隣の教会の方々との親睦をはかることにいたしました。

開催にあたって、深川在住のプロの音楽家菊入三恵さんにヴォイストレーニングやミニコンサートをお願いし、先生は快く引き受けてくださいました。

10月14日(火)は晴天の秋晴れに恵まれ、留萌、旭川のほか札幌からの参加もあって30名の方が出席してくださいました。午前中は皆で聖餐式をお捧げし、昼食後、菊入先生はおもちゃの笛や風船を使って、長い息の仕方や歌う姿勢など、笑いとおユーモアを交えて指導してください楽しい学びのひと時となりました。ミニコンサートでは聖堂いっぱい響き渡る澄んだ歌声に魅了されました。アンコールにはアメージンググレイスの他、北海道教区宣教150年記念聖歌となった「ピリカ、レラ、モシリ」を全員で歌い閉会となりました。

短いひと時でしたが、共に集まり、礼拝をお捧げし、昼食を共にし、共に笑い過ごすことが出来たことは当たり前のことではなく、喜びと一緒に貴重なお恵みを頂いたように思います。

高齢化、体力の低下、少人数化などマイナスと思われることは多々ありますが、出来ることを、知恵を寄せあって、祈りつつ歩んで行きたいと思えます。この度の礼拝の中で捧げられました信施金は能登の災害支援へ送らせていただきます。

貴重な被献日献金をありがとうございました。



感謝箱献金事務局から

感謝箱献金は「世界にまことの平和をつくりだす」活動

感謝箱献金事務局 運営委員長 井田 涼子

昨年は元日に起きた能登半島の大地震に始まり、気候変動の影響で記録的な猛暑や大雨による洪水発生など、世界各地で災害が発生し、多くの被害を出しました。

ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエルによるパレスチナ、ガザへの攻撃、ミャンマーの内戦など、多くの人命を奪い環境を破壊する「戦争」は続き、緊張と不信感が世界を覆っています。

感謝箱献金のお献げ先の報告からもそのことを感じます。—アジア・アフリカの若い年代の人口は多いが望む仕事は無く、無収入の状態—政治に対する不満をスマホなどのSNSを用いて発信、拡散する、各地でデモや抗議活動が同時に起きる。

活動の中心となるのはZ世代と呼ばれる若者たち。命の危険や暴動を伴う危険もありますが、この流れは今後も広がっていくでしょう。

私たちは感謝箱献金の活動を通じ、地図でしか知らなかったケニアと、現地の荒川さんを通じてオンラインで繋がり、サイディア・フラハの子どもたちに出会うことができます。子どもたちとの出会いは、ケニアに対する親密感と価値観の多様性が増す機会となります。

2021年2月に起きたミャンマー国軍によるクーデターは、民主化を求める国民の声に反して、軍が力で政権を支配し、反対する国民への攻撃を続けています。

「アトゥトゥミャンマー」は日本に住むミャンマールーツの人々と共に歩む支援活動を行っています。その中心であり最も大切にしているのは、毎週金曜日21時からzoomで行われる「ミャンマーを覚える祈り会」。教派や宗教を超えて集まり共に祈り、知恵を出しあって草の根の支援活動を続けておられます。祈り会は200回を迎えました。一日も早く、ミャンマーに民主的な政治が実現し、平和な生活が戻りますようにお祈りください。

* 「ミャンマーを覚える祈り会」は誰でも参加できます。(HPより)

お知らせ

6月17日(火)～18日(水)、横浜教区 横浜聖アンデレ教会にて、「日本聖公会婦人会 第28(定期)総会」を開催します。

編集後記

新しい年を迎えた喜びも束の間、すでに2月。今年は3年に一度の総会を控え6月に向けて準備が進んでいます。ニュースレターを私たち横浜教区役員会からお届けするのもこれが最終号となりました。各教区婦人会の皆さまが手を取り合って学びやふれあいの場を作り、献金を献げ、それを待つ人々へとお届けする。130年前から積み重ねられてきた活動の重さを、目の当たりにしました。バトンを受け取りひたすら走り、確実に次の方々へとつなぎたい、渡したら今度は沿道から応援します。自分で走るのも応援するのも1人じゃないから楽しいです。次の100年に向けて、これからの婦人会の大切さや楽しさが、このニュースレターを通して多くの皆さまに伝わっていきますように。

(日本聖公会婦人会 副会長 鷺沢 和子)



日本聖公会婦人会のホームページを随時更新しています。

『ニュースレター』『ガララヤのほとり』も掲載しています。

ぜひご覧ください！

<http://www.nskk.org/fujinkai/>

